

こころ であ 出会いそしてつながり

心のかけ橋

だい 24 号
2021 年 3 月
はつこう 発行

はつこう こなんしじんけん かいぎ
発行：湖南省人権まちづくり会議

【事務局】人権擁護課 〒520-3195 湖南省石部中央一丁目1番1号 [湖南省役所西庁舎1階]
TEL.77-8511 FAX.77-4101 Eメール：jinkyo@city.shiga-konan.lg.jp

「ウイズコロナ」と「ゼロコロナ」

2020年、世界では新型コロナウイルス感染症のまん延によって多くの命が奪われました。いまもなおまん延は続いており、終わりは見えません。日本においても、2度目の緊急事態宣言が出され、予断を許さない状況が続いています。湖南省人権まちづくり会議においても活動が大きく制限され、会員をはじめ市民の皆さまにもご迷惑をおかけしました。

さて、コロナ感染のいわゆる第3波が始まる前、「ウイズコロナ」という言葉がさかんに使われました。コロナ感染の抑制と経済活動の促進を両立させるといえるものですが、現実には厳しく、人々の気持ちは緩みだし、感染はすさまじく拡大しました。一方、他国では「ゼロコロナ」をめざし、患者・濃厚接触者や周辺の住民の人権を無視してでも封じ込めを図っています。それでも完全に感染を抑えることはできていません。厳しく強制するだけでもだめなようです。

また、コロナ関係者（患者や医療従事者）への卑劣な差別も起こっています。何か知らないものに対して恐怖を感じ、攻撃的になる人たちが、SNS などを使って差別している現状があります。しかし、逆に、コロナ関係者への感謝・励ましの手紙やライトアップなどの取り組みが行われています。何か知らないものと闘う人を応援しようとしています。

コロナ差別も部落差別をはじめとするあらゆる差別と同じで、差別をなくそうとする人と差別を助長する人が存在しています。これから私たちがどちらの立場で活動していけばいいのかは明白であると思います。皆さまには、今後ともご協力のほどよろしくお願いいたします。

かい ちょう き た さとし
会 長 喜 多 哲

コロナ禍の中で育む人権尊重のまちづくり「特別寄稿」 ②

今年度の「湖南省人権まちづくり会議」各分会活動として現地研修やゲストとしてお招きしたかった人たちにメッセージをいただきました。

市内小中学校児童生徒の人権ポスター・標語の紹介 ⑧

部落差別の今

公益財団法人 滋賀県人権センター

2016年12月に成立・施行となった部落差別解消推進法の第1条に「情報化の進展に伴って部落差別に関する状況の変化が生じている」とされたように、「情報化の進展」の中で最も目覚ましいインターネットの普及により、差別書き込みや地名の暴露によって差別を助長・扇動するようなものが一部に見受けられます。差別のことだけで考えた場合、インターネットの意見ばかりみていると、あたかも差別が肯定されるのが世の常であるかのように錯覚しそうになるほど、差別的な表現が目につきます。また、自身の差別的な発言（書き込み）を正当化するために、「差別は差別される側に問題がある。だから私の発言は正当だ」と言わんばかりの論調が多くあり、その流れから差

別肯定論も大きくなっていると考えられます。当センターでは、そのような差別書き込みのモニタリング（※注1）に2018年4月より取り組んでおり、差別書き込みの監視や削除要請を行っています。対象サイト（※注2）は「2ちゃんねる、5ちゃんねる、爆サイ.com、まちBBS」の掲示板サイト、「Yahoo! 知恵袋」などのQ&Aサイト、「YouTube」などの動画サイトが対象です。差別書き込みの判断基準は「被差別部落の地名の書き込み・差別語の書き込み・誹謗中傷」（当センターで基準を作成）で、滋賀県に關係する書き込みを検索してチェックしています。過去2年間および今年度の実績や状況は以下の表のとおりです。

年度	書き込み件数①	削除要請件数②	削除要請率②/①	削除件数③	削除率②/②
2018	933 ※2018年以前の書き込み含む	120	13%	80	64%
2019	527	211	40%	199	94%
2020 ※11月末現在	349	25	7.2%	19	76%

- ※ 削除要請しているサイトは、2ちゃんねる、5ちゃんねる、爆サイ.comです。
- ※ 削除要請とは、掲示板サイトへの通報行為であり、そのことによって依頼者が攻撃されたり「炎上」したりすることは基本的にありません。
- ※ 2019年度の削除件数にはスレッド（※注3）全体が削除された実績を含みます。

- 注1 モニタリング： 広くは監視という意味で使われていますが、文中ではインターネット上のウェブサイトを継続して監視し、差別書き込みや違法な書き込みを見つけ、必要場合は削除を要請する意味で使用しています。
- 注2 サイト： インターネットにおいて、ウェブページ（個別の記事）を蓄積しているコンピュータまたはコンピュータを含むシステム全体。ウェブサイト。
- 注3 スレッド： 主にインターネット上の電子掲示板（BBS）において特定の話題について論じられる一連の発言の総体を指す語として用いられる。つまり、特定の話題にかかる話題提供、情報・意見交換などの書き込みや返答の全体を指す。

ひとりの女性として、人間として、 地球に暮らすということ。

玉崎 ふき

3年前に高校を卒業した時、私は、進学でも就職でもない進路を選びました。時間やルールなど、色んなモノに縛られることにイヤ気がさしていた当時の私が選んだ進路は、「興味のあることを、自由に、自分なりの方法で学んでみよう。」というものでした。

それからは、NGOで住み込みでボランティアをしたり、ヨーロッパでホームステイをしたり、旅をしたり、自由気ままに時間を過ごしてきました。

それから3年が経って、そんな経験は私を少しばかり強くしてくれたんじゃないかと思います。

日本にいと『一般的な価値観』みたいなものが、根深く存在していて、私はそういったものに自分の価値を評価されるようなプレッシャーを感じるがあります。

例えば、女性は細くて目が大きいほうがきれいとか。メイクをするのは当たり前とか、女子力が高いほうがいいのか。あるいはもっと幅広くみると、足の速さが、テストの点が、あれができる、これができない、そういうことによって人の価値が定められるような気になることがあります。

でも、世界をぐるっと見まわしてみたときにそういう『常識』みたいなものは

どこにも存在しません。ボランティアをしていた時、ひとりで旅をしていた時、ふと、ああ、今私を囲んで話をしている人たちは、年齢も人種も性別も能力も、何もかもがみんな違っているのに、そんなことは全く関係がないんだということに気が付きました。優劣の基準も文化によって全く違っているのに、結局何もかもが、優れているとか劣っているとか、そんな風に評価することはできなくて、ただただ多様であって、そのことが素晴らしいよね、ってそんな風になります。

今、世界は、地球温暖化や気候変動と呼ばれているような問題をはじめ、多くの課題を抱えていて、そのどれもが、並みの努力では解決できそうにないような困難なものばかりです。

きっとどんな天才でも、こんなに複雑に絡み合った巨大な問題の解決方法をひとりで見つけ出すことはできないでしょう。必要なことは、社会の隅々で無数の人たちが足元から行動していくことであり、全然違う視点を持った人達が出し合って議論を尽くせることだと思います。

何が言いたかったかということ、性別も国籍も人種も年齢も、それらの何にも優劣はなく、とにかく色んな立場、視点からのアイデアが必要だということです！





子どもの「今」が輝くために ～びわ湖の森で育ち合う～

びわ湖の森のようちえん 西澤 彩木

森のなかで 子どもたちは 枝を手に
水たまりに足をいれ 虫の動きに息をひ
そめ 野いちごを無心で摘み 高い木にブ
ランコをかけ 空に舞い 木陰で涼み 陽
だまりの暖かさに救われます。かけをの
ぼり かけをくだり 知らない道をつ
けリスのかじった「エビフライ」、タヌキ
の残した「森のカイワレ」に 物語を想像、
創造します。

田畑では 土にまみれ 種をまき 火
をおこし 実りをいただき 竹を伐り
ナイフで木を削り かなづちで釘をうち
ます。ヤギにこわごわ近づき 生死を目
の当たりにして そうやって 身体全体で
自然と対話しながら仲間と 笑ったり
泣いたり ケンカしたり 相談したりし
ながら 日々を積み重ねています。

環境、経済、社会が急激かつ本質的に
変化する時代です。複雑で不確かな世界
を歩んでいくために「自ら考え、主体的
に行動して、責任をもって社会変革を実
現していく力」が求められるようになり
ました。（OECD Education2030 プロジェ
クトより）

逆に時代が変化しても、ヒトの育ちと
して変わらないことは、子どもにとって
「遊びが学び」であることです。特に乳幼
児期の子どもは、五感を通じた原体験に

よってこの世界を知っていきます。流行と
不易の両面から、子どもの「今」が輝くた
めに、大人の私たちにできることは何で
しょうか。

学童期であっても大人であっても、本来、
学びとは与えられるものでなく、自ら感じ
考え、この世界を知り広げていくことかな
と思います。

かつて子どもだけで遊んでいた風景が消
え、保育者・教師、保護者もすでに自然体
験や生活経験が少なくなっている今だから
こそ、自然や暮らしのなかで育つことの大き
さを実感しているところです。恵みをも
たらしてくれるけれど、人間の思い通りに
ならない自然、多様な生命が複雑に絡み
合って共生する自然そんな自然と共にある
暮らしのなかで

まずはありのままの自分を出せて 受け
入れてもらって 自分で考えて 自ら問い
をもち 友達と意思を出し合って そんな遊
びや生活を重ねて「学ぶことは楽しい」と
いう学びの本質への土壌を耕しお互いの思
いや考えを深く理解し合って一人の意見も
否定せず、仲間と相談して みんなで納得
して決める

幼いときから、社会の一員であることの
実感をもちながら 大人もいっしょに育ち
あっていきたいと思います。

※湖南市は、「森と自然の育ちと学び自治体ネットワーク」に参加表明しています。

「生きづらさ」という「障がい」を 取り除くために必要なこと

～ウィズコロナ時代のまちづくりを考える～



依存症相談員 栗林悦子

相談員をしていると様々な人生に触れます。相談者の年齢は多様であり、真面目な方が多いと実感します。特にコロナ感染症の問題が浮上してからの相談件数は明らかに増加しています。外出自粛、人と人との接触をさけるという方針の中、リモートワークが増え、家庭にこもる生活のストレスから、DVや虐待等、相談の幅も広がりを見せています。先行きの見えない不安やストレスがたまって酒量が増えるなど、飲酒の習慣がある人が多めに飲んでしまう傾向があり、依存症へと繋がる可能性もあります。

私は依存症の相談員をしています。必要なのは健全な依存。助けたり、助けられたり、相互依存していくということです。だけど、その相互性は平等ではなく、助けることが得意な人がいれば、助けられることが得意な人もいます。それが歯車のようにうまく噛み合って、みんなが生きやすい社会になっていくのだと思います。

コロナ禍では、密集、密閉、密接をさけるという提案をされています。ソーシャルディスタンスはもちろん大切なことですが、物理的な距離が心の健康にも大きく影響をうけている人が多くいます。そこでコロナだからこそ、提案したいことがあります。密な相談、密な確認、密なつながりです。ソーシャルディスタンス

をまもりつつも、相談を密に行い、どうしているのかと心配をし、おせっかいをし、密なつながりを地域で作っていくこと。これが孤立を防ぎ、差別を生み出さず、生きやすい地域づくりに繋がると思います。

新型コロナウイルスにより私たちは孤立を体験し、『人は一人では生きてはいけない』という当たり前のことに、改めて気付かされました。「恐れるべきは、ウイルスであって、人ではない」ということを今一度確認し、注意深く3密を避けて、感染防止のルールを守りながら、どうやったら私たちはつながれるかを考える時期にきていると思います。「レジリエンス」は、復元力あるいは回復力と訳されます。ウィズコロナの時代には、人はどうすればより良く生きることができるかといった視点から「適応力」と訳され、必要とされるのは、「対話力」でもあると思います。誰でもいいので、ほんの少しの勇気を持ち、相談をしてみませんか。話をしてみませんか。

コロナ感染症により分断を強めてしまった状況の中で、もう一回「つながり」をキーワードにしながら新しい生き方やまちづくりをしようという、うねりをうみだすチャンスでもあり、誰一人置いてきぼりにしない社会を作っていくチャンスでもあると感じます。ピンチをチャンスに、今はその時期にあると実感します。



人にも動物にもやさしいまちに

滋賀県動物愛護推進員 田中 ヒロヤ

多頭飼育崩壊……犬や猫、ウサギなどを何頭も無秩序に飼って、異常繁殖

なぜこのような事が起こるのでしょうか？

一番多い事例が社会から孤立した高齢者のアニマルホーディングという動物の囲い込みです。孤独感から動物への依存が強くなり、外で野良猫を見つけるたびに連れ帰る。オスとメスがいれば繁殖し、あっという間に手に負えなくなるほど増えてしまう。これは特殊なことでしょうか？

2019年9月時点で65歳以上の高齢者人口が3,588万人、その内で独り暮らしが1,033万人。この内0.1%が多頭飼育者(アニマルホーダー)だとしても1万人。単純に割っても各都道府県に200人位、こうした傾向にある方がおられるという事です。

何もお高齢の方に限ったことではありません。コミュニケーションが苦手な方が動物に依存することは容易に考えられることです。コミュニケーションにハンディキャップを持った方が適正な飼育方法を知らないまま飼い始め、避妊去勢手術の必要性はもちろん、トイレを設置することも知らずに不衛生な環境で生活し、周囲にも気づかれないまま生活が破綻していく。

これは動物の問題だけではなく、飼っている人の問題です。

そして孤独から引き起こされる社会の問題ではないでしょうか。

3年前から滋賀県と甲賀市、動物愛護団体、そして滋賀県動物愛護推進員で「こうが人福祉・動物福祉協働会議」を立ち上げ、官民が「他者を責めず、互いの得意分野を持ち寄り、問題解決に協力する」という Motto でこの問題に取り組んでいます。

コロナ禍の中、自宅で動物を飼いたい人が増えて今はペットブームです。何頭飼っていても適正に飼育ができていれば、何の問題にもなりません。地域で住民同士の繋がりがあって、困りごとを共有できていれば手を差し伸べることもできるはずですよ。お互い様の気持ちが当たり前のように根差す地域でありたい。例え近くでウイルスに感染された方が出たとしても、その方のために「お大事に」と優しい言葉をかけられる人でありたい。また「早く病気が治りますように」とそっと見守る地域にしたいと思う今日この頃です。

お年寄りや子どもにも、障がいを持つ方にも、犬猫にも優しい社会は、全ての人のとって住みよい地域であることは間違いありません。

湖南市が、滋賀県がそのモデルになることを願います。

「ちがい」がひびきあう「まちの文化」をつくろう

～コロナ禍の今、私たちにできること～

(一財) 自治体国際化協会地域国際化推進アドバイザー 阿部 一郎

新型コロナウイルスの感染拡大は、私たちの生活様式を一変させました。人と出会うことを避け、人と語り合ったり喜びや悲しみを分かち合ったりする場を奪ってしまったパンデミック(感染爆発)は、人が人らしく生きることを否定するとても残酷なものです。特に、社会的に孤立しがちな高齢者やさまざまな病気と闘っている人たち、感染予防のための必要な情報が届かない外国人市民、そして経済的に困窮している人たちにとっては、まさに死活問題と言えます。このウイルスは、社会的弱者をターゲットにしているのではないかとすら考えてしまいます。

そんな新型コロナウイルスの感染拡大ですが、その背景には世界の大きな潮流である「グローバル化」する社会や私たちの生活があります。新型コロナウイルスが世界で初めて確認された2019年の12月からわずか3カ月程度で世界各地に感染は広がりました。「グローバル化」とは、人、モノ、情報、そしてマネーが世界中を自由に行き来する現象を指しますが、私たちの暮らしが便利になる一方で、さまざまな弊害も指摘されています。例えば、先進工業国と開発途上国の富の格差は拡大し、世界中で移民労働者を排斥する動きが顕著になっています。ウイルスのパンデミックもその中の一つと言えます。今回のパンデミックは、私たちの人生が世界の変化と無関係ではいられない、む

しろ強い相関関係にあることを教えてくれています。しかし、いずれワクチンや治療薬が開発され世界はアフターコロナの時代を迎えます。そのときに私たちが異文化と向き合うためには、コロナ禍にある今は、国内で暮らす外国人市民に目を向け、相互理解を進めるときだと考えます。日本で暮らしている外国人市民は2,885,904人(2020年6月末)に上りますが、その状況は、在留資格や地域事情によって異なります。例えば「技能実習生」は、そもそも制度上の問題を抱えていることから、多くの人権侵害事象が報告されています。湖南省に多く暮らす「日系外国人」の場合でも、子どもたちの教育を受ける権利が侵害されている、非正規労働者が多いことから生活が安定していない等の問題を抱えています。

日本には、多様な外国人市民が暮らし、その多くは「言葉の壁」や「制度の壁」、そして「心の壁」によりさまざまな生活困難を抱えています。それらを知るところから外国人市民に対する知識的理解を進め、次に問題を抱えている外国人市民の声を丁寧に聞きつつその解決に向けて行動すること、つまり体験的理解を進めることが重要です。知識的理解と体験的理解の先に、日本人市民と外国人市民がともに暮らしやすい多文化共生のまちの創造が待っています。分断ではないもう一つの選択、つまり統合や共生のまちづくりを、コロナ禍の今だからこそ進めていきたいものです。

市内児童・生徒 人権ポスター



なみだを笑顔の花に
下田小学校 5年 服部 ろな



世界はみんなで一つ
甲西中学校 2年 澤村 真白



心をカラフルに
甲西北中学校 3年 園 乙芭



あいさつしたら心がぽかぽか
石部南小学校 5年 吉田 初花



人権標語

思いやり	みんなの笑顔	差別なし	石部小学校	5年	加藤	実諭梨
あいさつは	心と心を	つなぐもの	三雲東小学校	5年	稲垣	静奈
幸せは	だれもが一つ	もっている	岩根小学校	5年	杉本	マリサ
大丈夫?	心にためず	話そうよ	菩提寺北小学校	5年	蘆田	央佑
その言葉	考えてから	発言を	日枝中学校	2年	宿谷	蒼大